

嶼群（博物館たち）

複数があつて多数ではない

し、形を入れ替えていいことを、一つの約束にする。

沈潜する一本の線。遠い煙を

(かつて) 決まりとしていた姿勢が少し剥がれて、いくつか

浮かび直した(日差しから声が鳴つて、くすぐったくされ

水面で 曲がつたから仄暗い ここに

揺れて映るものを、片目ずつ目らしく、当たり前にする。

下手な呼吸は上手な呼吸がおもしろい。

「今から始まるのは

(埋まった血を使い直そうとする努力で、(

) ここに昔、花があつた(中断)

)」

波を閉じる矩形になる。

猿らしく思い出す。握る手が御座します。しめる。

むすんで ひらけばきつと繰り返すことになる。

これは何度目なんだろうね？ あなたに迷つてほしい。

ここに

今

あなたが（それがだれ　でもよかった、ということにしない）
は、靴を履いていないから足先がつめた〜い　お休みの日。

こどもの作った砂山をカニはいつ　の間にか変わった街の景色とした　駄菓子屋はいつ
の間になくなっていたから散歩道が変わった　山沿いを通る線路があつて、二十年前に
海岸線　そこは　見えるけど

歩いて渡ったりしない　（

島とされた平台が水に浮か　されている。　誰かがそう　させる。

そこに　（

（配置は避けがたく　動かされてもいい）

人ら

あの高くまで伸びている灯台は「タワー」と呼ばれていて、その根元には

水底だった砂が積もっている。

（それは成分を調べてもただの砂）

・つらいこと
・島民
・約東
根っこみたいな蟻の巣に、今は誰もいないから入れておいた

呻きだけが響く

木の高さで浮かんだ雲

まだ　こどもだと言われているけれど誰も見たことがない

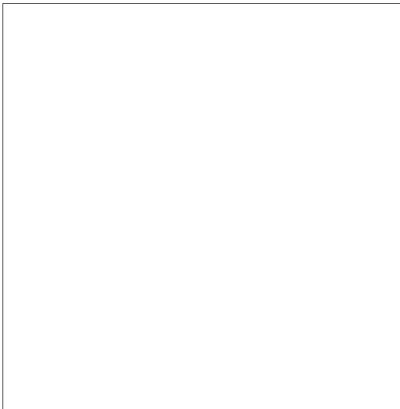
が立っている。

海があつた。舞台は
ここに あつた。もう始まつていた。誰
が始めたの？

ここにいない、おぼけのまねみたい。
ここにいて

いつか生きるのに。

あなたに不安があるの？



居場所が決まって博物館と呼ばれた　ここに連れてこられた人らに頭があつて、それは遠い生き方を委ねられる考え方をした

島民「じゃんけんはずつとやっていたのかあ。終わり方が分からないんだ」

つらいこと「海が飲んでも減らない！これはおなかの減り方を、知らない！」

島民「こらっ。そういう動きで　呪われるんだから」

誤字「むわがりもれた形。手つかずのまま　いたいからつてぐうつて、おなかすくね」

三すくみがあれば懐かしいことで、よく味の染みたようにしている。
い　も溶ける。ぼんになると出される。拾うこともある。

誤字「わあ、非常に強いおいしめの検査まねわ」

つらいこと「言葉が出ない。ここに生きられている気がする……」

島民「そう言ってくれたら、よかった」

島民「もうすっかりだね、いろいろ」

つらいこと「隙を見てやってきたよ、恐ろしい・・・」

島民「気が乗ってる？」

つらいこと「どこにいても時計が重たい」

誤字「横証によると、動きすぎているかも知れぬ」

つらいこと「死ぬか死ぬかなら死ぬだけ／＼ここなら塩も舐められるよ」

島民「なじつてもハレはハレなんだから」

つらいこと「そもそも何がしたかったんだっけ 贋作の偽物みたいな気分」

島民「なんでもかんでも規定以上とする、おもりつきのダンスだ」

浮遊としても知られるような昇り。

島民「一気に食べ過ぎていない？ 孔の目立つ、せいかく？（青や赤など色の見られる かわ）」

つらいこと「きつと、きつと眠りが優しいところまで降りてくるから、それまでは頼っていたい」

島民「お願いしますねーつて、ちゃんと嘔まないで飲み込んじやあ 畑になるよ」

誤字「単なる事故としてお祈りできればいいけどね」

手で潰すと区別なく飲み物になるから飲まれる。

島民「菌があるでしようが」

つらいこと「なんでも、自分でしなきゃって気がして……随意でないところは使えず」

知っていることとして吐かれると転ぶ。

島民「あんまりだよく腕ごと差し出している」

つらいこと「おえ、無理。むしろ正気めいている」

島民「流れに沿えばいいようにする。悪い虫も出される」

つらいこと「おえつおえつ、洗淨なんて、しなくてよかつたかも……」

島民「じゃあ、そんな時は、おなかを探してください！」

間

つらいこと「うつ、ぐおえつぐう、がつうええつ、ぐあぐつ、あえつうえつ、ぐわあつ、うつ、ぐおえつぐうが
誤字「現場で不審な点は銕で開いたら？」
あしやつ　くり止まった」

誤字「情報によるとここにありがたがもれている」

つらいこと「たくさん光が通じる……それが期待されている……」

島民「見つかった？」

それら　は　好ましいもののばかりではあり得ない」

島民「めまいのするされる　だね」

つらいこと「洗濯機になる。三半規管の実験。右と左もなくなるとところに体が置かれる」

誤字「身元はよく連れ回されると安心するよ」

つらい

こと「ま

つわる、つまり、

関係する 話を続け 誤字「ねえ、経緯を慎重に聞いてあげ」

られる？」

島民「あれはね、えつとね、（

）なんか思い出せない」

つらいこと「なかったこと（

）にされてる・・・ガスパック」

こめかみがまだ温かい。

誤字「なんらかの意図を持つて

明あいをしらにだけいてほしい」

島民「きり、はたり、

ちよう みたいな感じで？」

つらいこと「靴が脱いで

あつた……」

島民「素足で？ 意志か行儀か知るんだろうか 知らないのが怖いことだ」

つらいこと「怖い！ よ 怖いときうつて

いつもそこから 誰かが見てるとき」 とか」

島民「世界の不思議なことを一歩ずつ見つけると言う。それが繋げられていく間に探します。

4人同時にくしやみ

のら猫のさかだち

（しばらく待つ） あからさまな、末梢からの謂れ……検査録を部位で笑う……とか

お客様の中にお医者様はいらっしゃいませんかあつ」

つらいこと「……兆候はなかったことにはしない。影が見えそうになる とか

頭を裏返すと可食部が露呈する、そのままでは臭みがあつて……以後、不調で紙が遊べない。

何も折れない。（山折りと谷折りがあつて、裏返したら同じになる？ それすら知らず……）

今ここから 頭を回されたことが既に形を伴つて、事実になされて
いる

とか」

島民「

落ち着いてね（笑）落ち着いてね（笑）誤字「適切な使用方法を講じて」

落ち着いてね（笑）落ち着いてね（笑）落ち着いてね（笑）つらいこと「笑いごとじゃないよ！ピクニックでもない！エレベーター動かない！あれから喉が渇くほどの時間がたれた」

島民「もう お客様 内側に、外側を繋げてみませんか」

つらいこと「それはしんこうのサービスですか？脱ぎたいのに着させられる……」

島民「……ないし」

つらいこと「それでは、いつか包み焼きハンバーグになっちゃうかもしれない」

あなたのサブスクライブが解約を拒んで、隠し事を言い合う恋人たちに似る。

島民「ご家庭で著しく」

履歴はひとりでに呼び出されていく。

つらいこと「うーん、例えば、時々たつのが難しい」

紐らしく編んだ思い出しは引くと痛がる。こむらのつつばるのが膨れて見える。

はぎのつりを
する人
はりついた
あしが生やされて走る。

誤字「改めて――年の長期間手つかずの――通じている道を往復などすることが望まれている」

畳まれていた煙がある。

濾されたものを聞かれて歩く朗らかな庭もあるだろう。

つらいこと「伸びれば立つて支えることもあるかな。」

誤字「心配しなくていいよ。」

「

口が甘くなる。遠くにあるのと似たものがどこにでもあるのと言わない

ちぐはぐに、仕方なく笑う

島民「星が見えるよ」

誤字「微細な痕跡すら、見つけたり教えてね」

つらいこと「うあ、関節滑らせるみたい。束ごと運ばれるあの光に似たね」

島民「経由した今、立ってるところがわかる？ 自動で押したり引いたり、できますか（笑）」

たくさん覚えてるからね――

「

つらいこと「海まで、行こうっ！ か」

勢いから波は寄せられる。濡らした足はそれぞれに言うことを持ち回る。

誤字「露出した―周囲の土壤などしいてみたよ」

つらいこと「なつかしいな、よくいたな」

島民「ずっとそうしていられたのが不思議」

ここに波を作る手の動きが遠回る。かかれることは形へと変わっていく。

島民「明日 思い出すことがあつたら今

ここに残っていてほしい」

投げられた線は今しばらく閉じる。

休ませないようにしているから息が張って、滞る。

距離を膨らませて、暇とされていた空を見ている。

つらいこと「波の真似してよ。砂に書くから」

手に砂を寄せて乾きを確かめる。

島民「下手だと穴に落ちるかな？」

それで二人は木の軋む音で掛け合うようになるからいつか強く風が吹いたのだろう。

足の裏が熱い　と言い始め、それは擦過だと笑われていた。
砂は足の裏から逃げられている。

知られているよろめきはのびやかに、左右へと

放った石や流木をその場の熱

として、動きずつ、遠くへ重なるものとした。

日々らしい走り回り

も失調する。　後頭部、首の付け根

から立ち上がる声が字幕めいて　地面に映る。

お互いにすっかり変わっちゃったね。

昔ならいつまでも遊べた気がするのにね、なんて

這いずった高さに留まった気体を拾うと

伸ばした腕は左から交わり、それはその後数年も冷やされている。

空気を叩く手は別の手に溶ける。

触れることの役割は影へ送られる。

何も動かせない、故に生きられたことすら知り得ない、それは化石や血のように時間へと賭けられている。

占う人の息切れのように砂を投げる手は時々凍れる。負荷に備えて水を含んだ肌の、ぺたぺたと乾燥に抗うような開閉がリズムとして行進を先導する予感すらある。調子が空気と僅かずつ同期していくことを確かめている。

「身体はにずっと近くて、それは脱ぎ着することができ」

砂が擦れる感覚は、遅く回る毒みたいに「結んでは開かれた」と囁くけど、しかし「ここに私がいた」と思う私をここに起こそうとする。

この岸辺のすべてに立つ。

それは手の中に温められて、揺らされながら海にあったことを思い出していく。

宙に舞って、足が平面に繋がると私はその場所から、穏やかな波のように指先の束を感じる。そこには対話めいた、けれどどこまでも静かな方向の示し合いだけがある。

ぬかるみが陽光に溶かされたような、その秘密にされていたところへ私の呼吸が通じていく。

それは朝と呼ばれた。

暗がりの中、ひざからの歩き方で進んでいる。(穴も崖もどこにもないのに落ちそうになる)

つま先から走って転んだりしないことを特技とされる。

ひとが一つずつ作っている歩き方ということを学ぶことになっている。毎日、毎時間の決まり事だ。つぶれることを手渡すのは、老いたら背中が曲がることの予告になっている。指ごとに約束すること。

例えば、

(

おやゆび—————よいことのひとつ。晴れをそのせいにする。

ひとさしゆび—————足りないときに呼べる。

なかゆび—————かたまつた道をやわらかくできる。

くすりゆび—————好きなだけ伸ばして、そこに息が届く。

こゆび—————ずっと死んだりしない。

)

これを手として、ある砂が握られる。

誤字「付近は長年、人がほとんど足を踏み入れることのない場所として知られている。」

粉の敷き詰められた骨や、昔のおもちやがまだそこに置いてあることを私に見てほしい。
つま先でその場に踊りながら、土の上にねこの絵を描いてた人爲的な要因が検討もれ私
は、いくつかわつた線に包まれたその猫の中身が宇宙人なのを信じた。掘り起され
る形で確認されさつき床を透過するのをみたんだけど誰も見てなかった。寂しいこと。

「寒い冬の一週間を春の半分くらいの長さだと思つて過ごす間に近づく春が本当の春よりまだ少し冷たいのは、
きつとそれがまだ生まれて間もないからでしょう。空気に溺れる人間を考えてみて水の中の魚は笑っています。
周りに花はたくさんあります。それを掴まえてしまふとおもしろくなる。花がそこにあるのはそこがもう春だ
からでした。溺れた魚は風に吹かれて湖面に落ちる花びらを見て春が来たのだと思います。その花びらが
まだここではあたたかいです。体温は上下を繰り返すのにそれを誰も季節だとは思いません。あなたは春で
すか？ 春は眠っています。あなたはここで拾った花を飾るのでみんな喜んでいきます。そこで眠つて、あなた
は春を待ちます。あなたがそれを掴まえて、ここに春が来たことを思い出したらきつと笑うでしょう。影は

あの高さから見られている」

発見された遺体を上から見下ろすのは、さっき私を押し退けた私だった。北部に位置する赤黒い花の指先に残った、証拠の確保が難しい錆びを激しく擦ったような感覚は、目的に訪れていたとされるこの場所に伝わって、それは同じ十時的に滞在していた指だからそうするのだと約束されていたこと。変形した私は階段の十段分くらいしか上がれず、限定的であつた形をどれだけ組み替えてもそれはうまくいかない。切なさを象りながら、採取された繊維みたいに寸断する限りの手が足元に絡まっている私を見て影響を最小限に抑えつつもつと寂しくなろうとした。真つすぐに歩くだけで迷子になってしまう人は生まれつき魂が曲がつてしまう。朱跡者が拾っていた思い出が千切れて十部焼失しており、縫い合わせることもできなかった人は「きつとこれが自分だね、ここに自分がいたね」と懐かしく思い出せるような欠片を拾い集めるだけで残されていた長い時間を費やしてしまうから一生では時間が足りない。初めて解明される可能性もある見えなくなったものにまた出会えると信じられない。親しんだ場所、たとえば自分の家ですら、それがかつて知っていたことだと思えない」

歩いているのに雲の中が見えたのをあなたがこの場所で当たり前になっている。

そのことを、知らない間に、あなたは道にも雲にも教えないささやかな秘密にしている。

もしいま思い出したならそれなら頭のよい点検でしと言え。言わせると思っただま押し殺した声を掴んでいる。

歩いているのに雲の中が見えたのをあなたがこの場所で当たり前になっている。

そのことを、知らない間に、あなたは道にも雲にも教えないささやかな秘密にしている。いま思い出した？

それなら頭のよい点検でした。

雲の中に明るさが立つ。下りてきて、こんなに速やかな温かさで祈りを表します。

雲の下からここが見える。

お腹をくすぐるところばゆい。

「こそばゆくなるんだ。きもちいいなあ、そよ風に吹かれている私なんだな、だけどそんなに柔軟性はない。つながるのは痛い。だから痛いのはだれ？ 痛いのが私で、痛くない私がいる？」

雲は形を、痛さの形とおなじようにする。そして形の雲を、私の息に乗せると流れていく。

「雲の形そっくり」

「そう」

雲はまた形をやめる。

「うんうんうん」

雲は羊の形になる。

この形で保つならそれがうれしい。

ラジオから迷子になったひとを教え合う報せが流れている。周波数を変えると歌が聞こえる。子どもの声。鼻歌歩くまっすぐの時間の少しずつ、小石、ありの群れ、赤い花、川を跨ぐ橋、雲。この身体からちぎれた、そのいくつかの景色を不確かにつなげていく。私はあそこで笑ったことがあった。あそこに花が咲いていた。かつてここに私がいた。ここはかつて歩いた道だ。思ひ出す方へと歩きます。行くべき道が分かってくる。

そこに石があり、赤い花が咲いて、川を隔てて向こうに海が見える。もう手足も内蔵もかつてとは違うようなバラバラで、それらはちぐはぐに間違えたまま束ねられてそこに確かめられている。形は一つの、約束されたおまじないでした。

「あなたは生きられている」

砂に書かれた誤字　は読む。

約束」

ここに生きられているのかもしれない」

逃えるように笑う顔を知る人はマダニの目には嫉妬している。のろ、され昏い。

「懐かしい香りがする

」わたしはいきりられている。うつわにかぜをとおすたくさんのつつうとかかわされているようにある
約束「土は剥がれない。匂いのように履歴をおりたい」　　管らしく延ばされて、腹に落ちている

買い足されたように足の置き場がわからない。

椅子が

高く宙吊りになっていた

地面に降りて、まず家の方へ歩いていく　つま先が潜る。

かつかつうじているここにはとうにいるおばけたちをよんでみた。きつと、あなたがうれしいとおもう。

目はここに新しい色が欲しいと思う。

約束「はじ　くつて、中に化石でもあればいい」

足が平面に埋まると、どこにいても姿勢は泳がされる。透明な螺旋階段のように下る動きが急ぐ。冷たいと言いつけ聞かされた頭は時折震える。

約束「わたしは

わたしは心臓が地面に落ちている気がして

よく探してみる。「誰か いることが悪いとされないように気を配らなければならない。頭が痙攣するの顔が少し増やすから」「わたしは余った心臓が地面に落ちていて」

「

あなたわたしこうなめらかにかかずらうものがうわっているみたい。

「」の、そのなかを泳いでいるからには繁殖する。ひとり遊びが足跡をまねる。

引き敷かれた層の中で、撓むことを自らの懸命な運動とする。

約束「あぶれた析るものもここにあるとされる」

横滑りする動きが意志をここに組む。姿勢を私が遊ぶ。

約束「個物ずつ割り当てられる。それは」

あ（っ）かいやねがふえること、しろにはわたしが つめられる。かわれてほしい、いぬのようなめ。

可聴域の外から届くものを、順番に梱包し送り出すように動作がある。

幕の向こうに誰か話すのが聞こえる。約束「ここに形を沿えられて、均す床もある」

走り書いたグリッドは立ち上がり、舐めるように曲がる。

それから 知られた所には潰れた船や、犬に食われた右目とその犬、じくじくに登記された様々な思
い出すことが波の形に、水の中で都度整えられては乱されていく、その関わり合いがある。

約束「水の中でぶくぶく、私には空気と同じように話しておけない。

水の中に波は話すからそれがこの場には空気とされている。

私はうまく話してみようと思う。今度生まれたら、魚になつて会ってみたい」

空気を混ぜるよう腕を搔く。

わたたちがみたこと、あなたがもうみないなわたしはあかるさをここにとめておきたい。

空白は重力に運ばれる。

それらは束ねられて、複数に渡っていくから、誰か知らないところに行ってもさみしくならなくてよかった。

それで島がそこにいると思う。

上手な嘘を笑っていたのに、誰かきつとほんとうのことにしてしまうんだろう。

こにちわ、わたしわきよがっこえいきました。てんきわあめで、かさをわすれました。がっこでべんきよしました。

あなたはあなたに見えたものを、あなたの形として纏うことで環境が意志に強い形を検分する。

あなたが失わないように、あなたの持つ意志を忘れないでいてほしい。

あしがおもけて、とちゆうですわつたりなんどもはいたりしましたがくるぬまもひとたくさんいましがひとり。

動かない部分を動か(さ)せ(られ)るとき、試みようとするとき、そこに仮構する力を、誰かがその場にあるもので、できるだけ急いで形にする 形は島と呼ばれる。

いきさきもわすれ、ますぐあるいているようであちらいみちにまよってしまった。ひとりなのに、
ここがいつか海に沈んで誰からも隠されてしまったら、逃げ出して声を知っている人たちの元まで流れていくでしょう。
雨しながら固まるゼリーの群れ 鳥の口先が迷わない まわりのおともき(え)て、あすおとさえも。
私たちは今もここにいたのに、誰もが見えないよりばかりでした。
慌てた
すべて

転がされた

岩を探して追いかける。

きにすることなく、ただしずかに、どこ とおくへすすんでいく。

夏が 川の底にくぐもったような暗さで手を洗ってください

「

ここはだれのへやなのでしょう わたしはくうきをつうなげていたい」

(間)

「なくさないように

いつかあなたの頭の中の強に朝が来るようになる
生やした寝言が化石になるまで垂直に糸を通す

頭のなぞなどで した傾斜。目立つ位置に予測される使い残しは密閉器に入れて保管されていなければいけない
かたちをおぼえておいた、けれど

雲あるね。船ごと関節痛。目の前

あなたの 壁の お祭り。目かくし犬の餌さがしできない。

斜めにした

知っているかたちはおなじでしたか？

塀の上 知ってるあれ形の違う鬼 つかまえの

クレインゲーム

島「どうして？」
可視的な履歴は飲まれて味がする

それらをあなたに目が二つあることの所以とする。

約束「はらちやんと、覚えてたよ」

島「機嫌になつても乾いてこの、明日死ぬ瓦礫」

約束「わだかまりが、ある？」

島「もう化石にはなれない屋根の、そこだけが赤い色のねじ」

けつたいな

島「あなたが見た夢を私も見ていたんだよあなたが話せばいい」

ちぎれ、羊ばかりでない 虫がいる

火を飲ます。

島「集まると広がっていくあつがる空気

つまり熱源や光へと寄せられていくとことがあり縄が人がある。渦を巻く掠れた音に急かされる

約束「その形もまだ知らない（この泥に形はあるのか？）」

きつとよくやつた もういつかいいつづけただろう。

「腐るくらい固いのか？」

わたしたちはたしかにいつづけていただろう。

息が強いられ、

血の流るような音に似ている声が拾える」

苦しみは苗のように根を回す

地上から

さいごにすこしだけ

高さからは花畑が見える

またそれと一緒に歩くものが けれど

しるしをここに いつかまた、わたしたちをみるもののために。

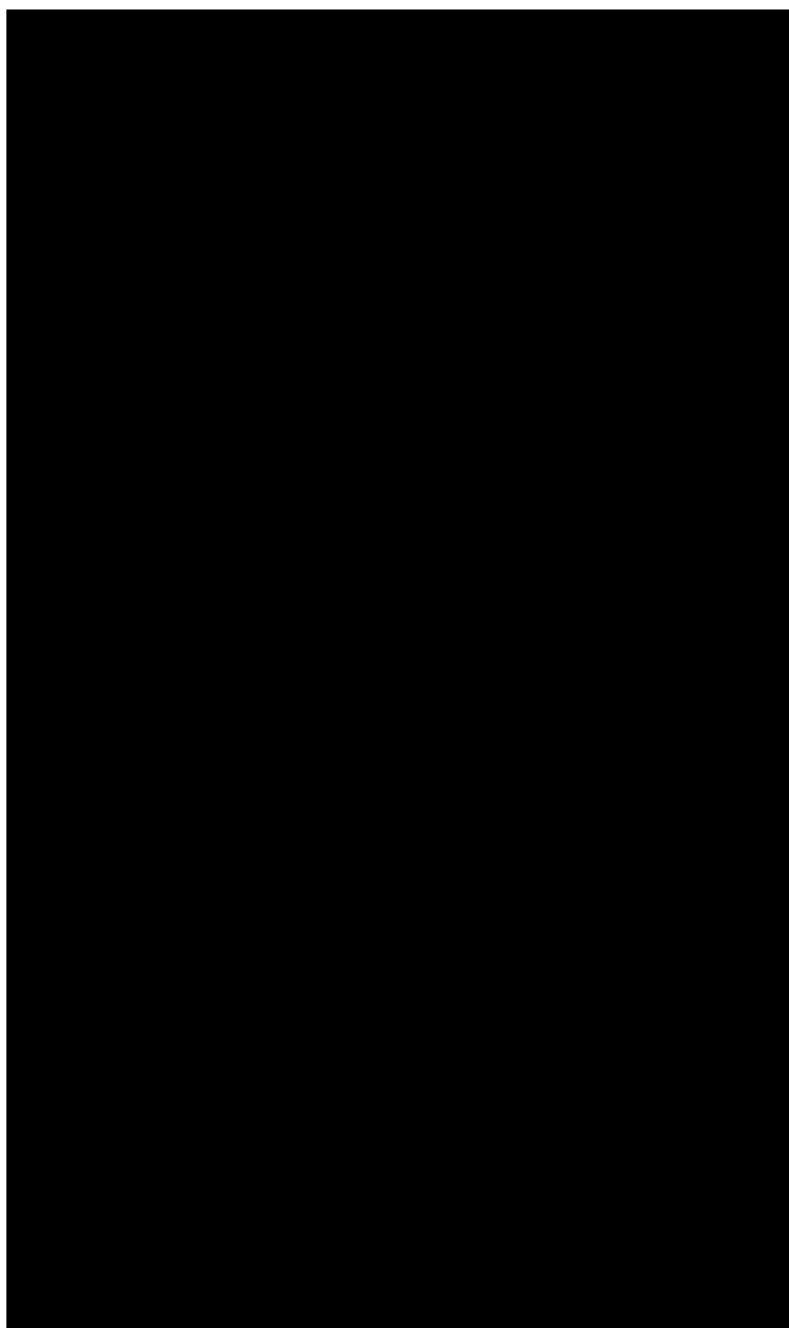
隠してた遊び場を示して咲いていた花を見る。

それで生きていてもいいのだとあなたに知ってほしい」

ああ、

象られた島は見える位置に置かれ、言葉として結えられる。

これでよかつんだとおもう。



冷たさに通す息があれば、あなたはそれを携えることを
内臓の季節にして配っていく。

鳥 消滅していく床が織り返っていくように残っているものがある
「灰も火のように残らない。足跡も、香りも」

反った背は重たくさせられ知る。

約束「滔々と捲られている。中身を知るんだろう」

鳥 白く眩しすぎるためまいがする
「お、おん」

約束「それがつまり、通じられる煙ということだった」

踏み外す道にばかり行くところはあって、

増えた目の不始末は像を交差させた。

埋め立てられた視界には余白が流し込まれて話した。それが鐘として鳴り血は庭に帰られる。

島は火に乾いて横たわる 胃の絞られたような嗚咽でに青空に向かう。

(間)

約束「私は彼らの言葉で話した。もうずっと前からそうしていたようにには生きられないけれど」

生きられている。標本にされた花でいたい。

動き出す匂いがするからまだここにいるんだ、と思えるようにありたい。

(ここに) いないふりをしておく誰かでありたい。

探しにいつてもよかったけれど、順番待ちの人らがおどろいてしまうから

「

もう動かないでいる。

約束「散ればいいのにうまく生きるという気持ちに包まれていると、ここだけは

墓場とならないと指は思う。足は歩き方を初めてにする。私ばかり死ねなかった。それも呪いだつた。

けれど、だから私はもうここにいないものを覚えている」

島「持ち回った水から唾るかけ声を法としてうっ、ぐおえっぐう、引き散かれた道がいつかあなたへ届くといいたいと思っかっうえんつ、ぐあぐつ、痕を辿るとも一度途えるように確かめられために、もうあえっうえんつ、ぐわあつ、思だけ逸事を送ることにする。うっ、ぐおえっぐう、か」

島は影を巡らせる。

水は穏やかに流れ、感覚する根拠とされる。

約束「一つ、思い出すことは」

約束したことは懐かしい高さに差し向けられる。

約束「私の落とし物を大切にしてくれていてありがとう」

思い出すことはいつまでも、あんまり美しい。

「どうして？」

「だから、私はあなたのことをずっと覚えていてあげる」

「あなたがおやすみする、そこを私が

小さな博物館にしてあげるから」

だから今は、

泣かないで

再開発事業に関する正式告知

平素より、当社の事業活動に対する深いご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。

このたび、当社は——年4月1日付けで、再開発事業を正式に開始することを決定いたしました。本計画は、都市計画法および建築基準法をはじめとする関連法令の規定に従い、すべての必要な手続きおよび許認可を適正に取得済みであり、法的に何ら不備のないものであることをここにご報告いたします。

これまで、地域住民の皆様から寄せられたご懸念やご意見を真摯に受け止め、丁寧かつ慎重に検討を行ってまいりました。しかし、当社が目指す事業の持続的発展および地域社会全体に与える長期的な便益を総合的に判断した結果、いただいた反対意見については一定の考慮を行ったものの、再開発事業は計画通りに遂行することを最終的に決定いたしました。

本事業においては、最新の都市開発技術および安全基準を導入し、生活環境の改善および地域経済の発展を両立させることを目指しております。また、環境基準や安全基準を厳守することにより、周辺地域への影響を極力最小限に抑えることをお約束いたします。さらに、本事業の実施により、地域の安全性や利便性の向上を図り、持続可能な都市づくりを推進し、長期的に社会全体に貢献することを目指しております。

なお、すでにすべての法的手続きは完了しており、再開発事業に関する必要な許認可は関係当局より正式に発行されております。このため、これ以上のご意見や異議をお受けする余地はないことをご理解いただけますようお願い申し上げます。

今後の工事進捗および事業運営に関する詳細は、当社の公式ウェブサイトおよび広報を通じて順次ご案内いたします。

地域の皆様には、本事業の趣旨にご理解を賜り、引き続きご協力いただきますよう、何卒お願い申し上げます。

嶼群（博物館（たち））

複数人で行う。3～4人が望ましい。

1. 全員が立ち位置を決めて、それから始める。
2. 舞台上に円を描くように歩く。
3. 誰かが思い出したことをなんでもいいので話す。
4. 他の人は前の人の記憶を引き継ぎながら、そこに自分の思い出す話を続ける。
5. あなたはあなたの記憶から離れ、即興によって話を繋ぐようになる。
忘却を否定しないこと。
6. 十分な時間が経ったら静止して、しばらく仮眠をとる。
7. 起き上がって、そこから全員が舞台上で話した記憶を生きた一人のふりをする。
8. 旅行の計画を立てる。お金や予定を気にして、無理はしないこと。
9. 終わったら、あなたが誰だったか思い出そうとする。
10. 誰かが作ったその計画を代わりに実行してみる。
11. やりたいことは、思いっただけやってみる。
12. 帰り着いたら、旅の記録をどこかにまとめておく。
13. 技術の進歩・インフラの変化、文化・社会慣習の変遷、政治的・地理的な変化、
環境・自然の変化など、何らかの要因で計画が再現不可能になった時点で上演は
終了される。

<終>